

『舟』は、アンドレイが母親から伝え聞いた救出劇が物語の核になっている。

1947 年、日本人強制送還の日。ロシア人との「共生」生活も約一年が経った頃、島の沖に見慣れぬ貨物船がやってくる。ベテラン漁師の浩は息子の勇夫と一緒にいつも通り海に出て魚を釣るが、ふたりが乗る船はエンジン付きのポンポン船ではなく「箱舟」だった。浩は船の操縦と漁のやり方をロシア人に教えるうちに、互いに信頼関係を築いてゆく。他、日本の船職人のもとで船作りを学ぶニコライ、その娘のカーチャと勇夫の恋心、誠とヴェーラの秘密の逢瀬、強制送還の任務を担った内務人民委員部の冷酷なフロロフ、ソ連当局と日本人の狭間で苦悩する日本語通訳のカジン、引揚げ船に「もっこ」で吊られて乗せられる日本人、ロシアの子どもたちの遭難、決死の救出劇……。

大陸から入植したロシア人と故郷を追われる日本人、それぞれが織りなす人間ドラマには単純な二項対立をはるかに超えた魅力がある。ロシア人がロシア人の目線で描いた終戦後の北方四島にまつわる物語は珍しく、ロシア人の微妙な心情も描かれているところが面白い。

この作品を翻訳しながら、ロシアと日本でこの事件に関する情報収集と裏付け作業を進めた。

幸い、亡くなったアンドレイの妹が現在色丹島に暮らしていて、同じく母親からこの救出劇のことを聞いて育ったということがわかった。しかも、母親と一緒に箱舟に乗っていた叔母のガリーナさんがウラジオストク近郊の町にご存命で、この救出劇をはじめ当時の暮らしぶりを直接語ってくれることになったのだ。貴重な家族写真も提供してくださったのでとても感謝している。

本書ではガリーナさんのインタビューの他、この家族と同じ時期に志発島に移住し、この「箱舟救出事件」のことを書き記したロシア人の証言も収録する。ロシア人の大人たちが慣れない船で救出を試みたが失敗したこと、海を知り尽くした日本人漁師が風向きや潮の流れを考慮して 6 キロメートルも流された子どもたちを見事に救出したことがわかったのだ。当時の入植したロシア人から見れば神業に見えただろう。いつばう、日本人漁師にとってはそう難しいことではなかったのかもしれない。だから周囲や子孫に語り継ぐこともなかった……。日本側に証言が見つからないのはこうした事情だと推測している。

ガリーナさんのインタビューより

私たち家族はこの日本人のことをいつも思い出し、子どもたちにも語って聞かせました。そして、いつしかこの物語が私たち家族だけでなく、たくさんの人々の財産になったのです。私たち家族が持つ記憶がもっと沢山の人の目に知られ、人々が互いに思いやり助け合うよう、大切なことを理解する手助けになるように願っています。

他、12 歳まで志発島で暮らし、ロシア人との共生期間と引揚げを体験された木村芳勝さんのインタビューも収録、『舟』は筆者が翻訳し、皓星社より今春、出版予定。

日口交流協会講演会／23 年 11 月 26 日／講演要旨

「日口、日中の外交の現場に立って」 中口国境問題の解決の分析

講師；井出敬二氏（立教大学大学院法学研究科）

私は 1987 年に外務省に入り 2020 年に退職した。その間、ロシアと中国の大使館で外交官として勤務した。2017 年に出版した本「＜中口国境＞交渉史—国境紛争はいかに決着したのか？」に書いた内容をもとに、ロシアと中国の国境交渉について解説したい。

* * *

ロシアと中国の関係史は、「タタールの軛」と呼ばれるモンゴルがロシアを間接支配していた時代（13～15 世紀）に遡ることができる。学問的な定説があるわけではないが、モンゴルの支配はロシアの中央集権的で垂直的な統治スタイルに影響を与えたのではないかとされている。

1618 年、明の万暦帝の時代にロシアはペトリンという最初の公使節を中国へ派遣した。その後、中国は清の時代になるが、ロシアのシベリア東進にともない、1652 年に清とロシアの最初の武力衝突が起こり、翌年ロシアはネルチンスク（現在のチタ市の東方 200km）に砦を築いた。その後もいくつかの衝突があり、結局、1689 年にネルチンスク条約が結ばれて、アムール川の支流アルグン川の西側と、アムール川（黒龍江）とスタノボイ山脈（外興安嶺）を結ぶ線に最初の中口国境が定められた。ネルチンスク条約は清がヨーロッパの国家と締結した最初の対等な条約である。

国境交渉開始前の歴史関係

その後も 18～19 世紀を通じてロシアの東進と南下は続き、1858 年の璦琿条約で清はアムール川（黒龍江）以北の領土を失い、アムール川に合流するウスリー川の東側（沿海州）は両国の共同統治とされた。しかし、1860 年の北京条約で清は沿海州もロシアに獲られてしまった。ネルチンスク条約時の領土と比べて、清は約 150 万 km²（日本の面積の 4 倍）をロシアに奪われたというのが、中国の言い分である。璦琿条約が結ばれた中国・黒龍江省の黒河（対岸はロシアのブラゴベシチェンスク）には璦琿歴史陳列館という歴史博物館があり、ここには中国から見ていかに多くの領土をロシアに奪われたかを示す様々な展示がある。

中国とソ連・ロシアとの国境は、ロシア極東—モンゴルと接する東部国境とは別に、西部国境もある。ソ連時代には、モンゴル—ロシア—カザフスタン—キルギスタン—タジキスタンと西部で接していたが、現在の中口西部国境はモンゴルとカザフスタンの間のごく短いものである（約 54km）。

20 世紀に入って中国とロシアで革命が起こった。中国は辛亥革命（1911 年）で中華民国となり、ロシアでは十月革命（1917 年）で帝政が倒れソ連邦が成立した（1922 年）。1924 年にソ連と中華民国は国交を結び、1925～26 年に国境交渉を行ったが、これは決着しなかった。この時の詳しい交渉内容は明らかになっていないが、ロシア（ソ連）の外交官が書いたものでは、中国側はかなり大幅な領土要求を行ったと言われている。その後もソ連と中華民国の間で国境紛争があり、1929 年にソ連はアムール川とウスリー川の合流点にある中洲＝大ウスリー島やタラバロフ島（中国では両方とも黒瞎子島）を占領してしまった。

国境交渉第一段階（1964 年 2 月～8 月）

第二次大戦後、1949 年 10 月に中華人民共和国が成立し、1950 年 2 月に中ソ友好同盟相互援助条約が締結され、中ソ蜜月時代が始まった。しかし、1960 年代に入ると中ソ論争が起こり、国境問題が顕在化する。中国側は、璦琿条約、北京条約は「不平等条約」だと非難する。

実は 1964 年の 2 月から 8 月にかけて第一段階の中ロ国境交渉が行われた。この時、中国は周恩来が外交交渉にあたり、「清の時代に結んだ条約は不平等条約ではあるが、それはそれとして、現在の状態を前提として交渉を行う。つまり 150 万km²の領土要求はしない」という姿勢だった。ところが 7 月に毛沢東が『ちゃぶ台返し』をやってしまう。毛沢東は、日本社会党訪中団との面談で、第二次大戦におけるソ連の領土拡張を激しく非難し、「（ロシアは璦琿条約と北京条約で）ハバロフスク、ウラジオストク、カムチャツカ半島を含めてバイカル湖以東をすべて切り取った。われわれはまだこのツケを清算してもらっていない」と爆弾発言をして、これで毛沢東の存命中はソ連との国境交渉は進まなくなった。

国境交渉第二段階（1969 年 10 月～78 年 7 月）

1966 年に文化大革命が始まり、ソ連大使館に紅衛兵が押し掛けるなど、中ソ関係は緊張した。そして、1969 年 3 月にダマンスキー島事件が起こる。アムール川（黒龍江）の中洲＝ダマンスキー島（中国名：珍宝島）で武力衝突があり、中ソ合わせて 100 名以上が死亡した。当時、中国はソ連が先に手を出したと激しく非難したが、今日ではこれは中国側が仕掛けた事件であったとみなされている。

ダマンスキー島事件を受けて、1969 年 10 月から 78 年 7 月まで、第二段階の国境交渉が行われたが協議はほとんど進まなかった。

国境交渉第三段階（1987 年 2 月～91 年 5 月）

1976 年に毛沢東と周恩来が相次いで亡くなり、中国は鄧小平の時代になる。ソ連では 1985 年にゴルバチョフが書記長に就き、ペレストロイカが始まった。ソ連と中国の間で 1987

年 2 月から第三段階の国境交渉が行われ、東部国境交渉は 91 年 5 月にほぼ妥結、西部国境は 94 年に決着した。

1989 年 5 月にゴルバチョフが訪中して首脳会談を行ったとき、鄧小平は帝政ロシアが不平等条約によって中国から 150 万km²の領土を奪った、ソ連は 1929 年に黒瞎子島を占領したと長々と述べたが、最後には「これらの問題（歴史上の負債）は帳消しにしよう。…語り合えば用事が済み、過去に終止符を打つことができる」と言い、周恩来の路線にもどった。鄧小平のこの決断によって中ロの国境問題は最終的な解決に向かった（この発言は中国が公式に発表している鄧小平演説集に収録されている）。

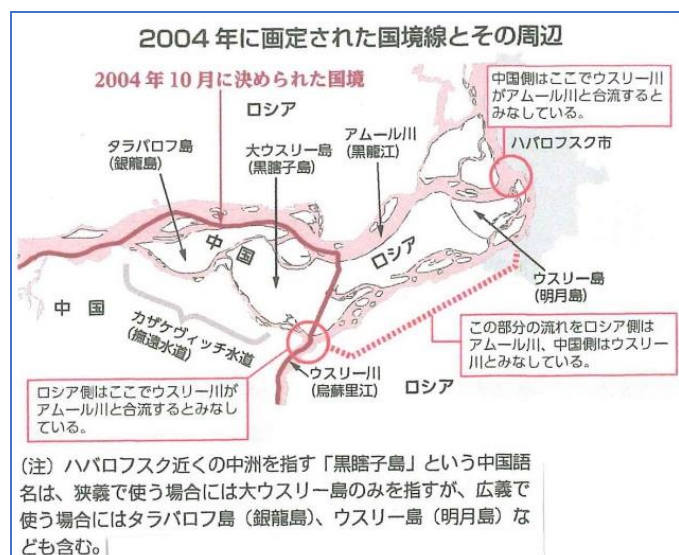
1990 年 4 月、中ソは「国境地帯の相互兵力削減および軍事分野の信頼醸成に関する原則協定」を締結。91 年 5 月に江沢民が訪ソして「中ソ東部国境協定」に署名した。91 年 12 月にソ連が解体したので、これはソ連と中華人民共和国が署名した最初で最後の国境協定となった。国境河川＝アムール川とウスリー川の中洲の島々のうち大きな 2 つの島（黒瞎子島＝タラバロフ島と大ウスリー島）だけが問題として残ったが、それ以外はすべて合意が成立した。

1994 年 9 月にはエリツィン大統領と江沢民主席の間で、「中ロ西部国境協定」が署名された。ソ連解体後なので、西部国境はわずか 54km のみだが、それ以外にも中央アジアのカザフスタン、キルギスタン、タジキスタンの 3 国と中国は国境を接しており、この 3 か国に中国とロシアを加えて 5 カ国で「国境地区の軍事分野の信頼醸成措置協定」（96 年 4 月）および「国境地区の軍事力相互削減協定」（97 年 4 月）が締結され、国境地帯の緊張緩和が進んだ。

国境交渉第四段階（2001 年～04 年）

2000 年にプーチン大統領が就任して、江沢民、胡錦濤と国境問題に取り組んだ（中ロ国境交渉第 4 段階、2001～04 年）。ロシア側は当初、タラバロフ島も大ウスリー島も全てロシア領だという立場だったが、01 年 11 月モスクワの交渉でタラバロフ島を中国に譲ると提案した。最終的にはロシアがさらに譲歩し、タラバロフ島と大ウスリー島を合計した面積を中ロで折半する形で妥結し、「中ロ東部国境補充協定」が調印された（2004 年 10 月）。大ウスリー島の西部分とタラバロフ島を中国領とし、大ウスリー島の東半分超をロシア領として、最終的な境界標識の設置作業が終わったのは 2008 年のことである。

黒瞎子島（ヘイシャーズ島）の問題がどうして最後まで残ったか。北京条約（1860 年）では、アムール川とウスリー川の合流地点で、アムール川の北側とウスリー川の東側がロシア領、アムール川の南側とウスリー川の西側が中国領としている。しかし、アムール川とウスリー川の合流点がどこなのか明確ではなかった。黒瞎子島（タラバロフ島と大ウスリー島）の南を流れるカザケビッチ水道をロシア側はアムール



川だと主張して、この水道とウスリー川がぶつかる地点が合流点だという。中国側は、アムール川の本流は北側にあり、ウスリー川との合流点はハバロフスク市のそばだと主張する。合流点をどこにするかによって、タラバロフ島と大ウスリー島の所属が違ってくる。

さらに北京条約にはロシア側が作成した地図が付属しており、その地図の有効性をめぐっても中ロの見解は分かれていた。

この論争には中国側に分があるように思われるが、タラバロフ島と大ウスリー島をどちらも中国領としてしまうと、ハバロフスク市の川向うがすぐ中国領となり、ロシア側の防衛上の不安が大きくなる。結局、中国側も妥協して、半々で決着することになったようである。これは最初から半々＝フィフティ・フィフティの原則があったというわけではなく、さまざまな利害調整と交渉の結果、そうなったものと思われる。

外交交渉において、どちらかが一方的に勝利するということは考えられない。「どちらも敗者ではない」と見られない限り、交渉は妥結しないと言える。

交渉結果が意味するもの

1964年から2004年まで40年間の国境交渉の結果、中ロ国境のアムール川・ウスリー川・アルグン川の合計2444の中洲・島のうち、1163(886 km²)がソ連・ロシア領となり、1281(851 km²)が中国領となった。

ロシアは帝政ロシアが獲得した広大な領土を中国に認めさせた。一方、中国は失った広大な領土の「失地回復」要求を放棄し、ロシアとの安定的な関係を築くことを選択した。

ロシア側の受け止め方としては、中国に妥協しすぎだという反対論もあったが、コサチョフという議会の国際問題委員長が、東部国境補充協定の批准審議で、次のように言っているのが注目される。「中国とロシアの経済成長、軍事力増大の速度には明らかに開きがあることを考えれば、(この問題を先送りすれば)ロシアではなく中国を利することになる。領土

問題には常に緊張激化のリスク、軍事紛争のリスクが潜んでいる。本協定の批准により、われわれは国境紛争に終止符を打ち、ロシアの安全保障を確保できる」。これは中国の国力がロシアを上回っていることを認めた上で、係争問題を早く解決しようという、非常に正直な発言である。

ロシアと中国、今後の関係

米国一強の現在の国際体制に対して、中国とロシアは多極化を唱えている。冷戦終結(89年12月)・ソ連解体(91年12月)の後、米国が押し進めた各国での民主化体制変革、カラー革命、和平演変に、中ロ両国はともに警戒し、反発しており、戦略的な相互協力関係を築いている。ウクライナ戦争が始まってからは、ロシアにとって中国は頼りになる大きな存在となっている。

中ロの違いとしては、ゴルバチョフ以降、ロシアでの政治改革、民主化と自由化に中国は警戒した時期があった。中国はグローバリゼーションで大きな利益を得ているが、ロシアはさほどでもない。

ロシア側にも中国への過度な依存は避けたい気持ちがあるが、ウクライナ戦争下の資源輸出などで、その依存は強まっている。プーチン大統領は最近、中国との同盟関係を志向するとの発言をしているが、中国は正式な同盟関係には慎重な姿勢を取っている。中国とロシアはお互いに助け合う関係にありながらも、微妙に異なる思惑を持った関係であると言える。

冷戦終結後のロシアでは、西欧民主主義・自由主義を信奉しヨーロッパの一員になろうという考え方と、リアリズムと多極化を掲げるユーラシア主義の考え方の両方があったが、プーチン体制の強化とともに西欧主義が低調になり、ロシア独自のアイデンティティを追求するユーラシア主義が強まっている。

中国では、外交において難しい問題は棚上げにして現状維持をする鄧小平の路線が長らく基本方針だった。そのおかげで中ロ国境交渉は妥結したし、中国は日本との尖閣問題、インドとの国境紛争や南シナ海の領有権問題でも、問題を棚上げにしてきた。しかし、習近平時代になって、この路線は大きく変更されたように見える。

今後、日本の対ロ外交、対中外交は、過去の外交交渉を踏まえ、最近の戦略的な情勢変化を考慮に入れつつ、検討していかなければならない。

(図は、当日の資料「中国とソ連・ロシアの国境交渉を振り返る」グローバル経営2013年4月号より転載させていただきました)

※本稿は、当日のメモおよび講演資料をもとに文章化したものです。文責はすべて編集部にあります。